



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第十四卷

河出書房版

現代日本小説大系 第四十卷

昭和二十六年六月二十日 初版印刷
昭和二十六年六月二十五日 初版發行



著者 田山花袋

代著者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
發行者 河出孝雄

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會

編纂者 片岡良一
印刷者 東京都文京區戸町七十一番地
小泉輝章

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八
株式會社

河出書房

會員番號A一一〇一四番
電話神田(25)三二七四番

現代日本小説大系(並製)

改定 定價 貳百參拾円
地方賣價 貳百四拾円

小泉印刷株式會社印刷

河出書房

目次

岩野泡鳴

耽溺

ぼんち

人か熊か

田山花袋

明るい茶の間

旅の者

四

五四

七六

九六

一九

正宗白鳥

牛部屋の臭ひ

一六

死者生者

一五

徳田秋聲

あらくれ

一七

解説（片岡良一）

一八

岩野泡鳴

耽 ぼ 人
溺 ち ん か
熊 か

耽溺

一

僕は一夏を國府津の海岸に送ることになった。友人の紹介で、或寺の一室を借りるつもりであつたのだが、たづねて行つて見ると、いろいろ取り込みのことがあつて、この夏は客の世話が出来ないと云ふので、またその住持の紹介を得て、素人の家に置いて貰ふことになった。少し込み入つた脚本を書きたいので、やかましい宿屋などを避けたのである。隣りが料理屋で藝者も一人かゝつてゐるので、時々客などがあがつてゐる時は、随分さうざうしかつた。然し僕は三味線の浮きくした音色を嫌ひでないから、却つて面白いところだと氣に入つた。

僕の占領した室は二階で、二階はこの一室よりほかになかつた。隣りの料理屋の地面から、丈の高いいちじくが繁り立つて、僕の二階の家根を上までも越してゐる。いちじくの青い廣葉はもうさうな物だが、之を見てゐると、何となくしみみりと、氣持のいい物だから、僕は芭蕉葉や青桐の葉と同様に好きなやつだ。而もそれが僕の仕事をする座敷から直ぐ

そばに見える。

それに、その葉かげから、隣りの料理屋の綺麗な庭が見える。燈籠やら、いくつにも分岐した敷石の道やら、瓢箪なり——この形は、西洋人なら、何かに似てゐると云つて、婦人の前には口にさへ出さぬといふ——池やら、低い松や柳の枝ぶりを造つて刈り込んでゐるのやら、例の箱庭式はこせつて厭な物だが、掃除のよく行き届いてゐたのは、これも氣持のいい事の一つだ。その庭の片端の僕の方に寄つてゐるところは、勝手口のあるので、他の方から低い竹垣を以つて仕切られてゐて、そこにある井戸——それも僕の座敷から見える——は、僕の家の人々もつかはせて貰ふことになつてゐる。

隣りの家族と云つては、主人夫婦に子供が二人、それに主人の姉と藝者とが加はつてゐた。主人夫婦は極お人よしで家業大事とばかり、家の掃除と料理との爲めに、朝から晩まで一生懸命に働いてゐた。主人の姉——名はお貞——と云ふのが、昔からのえら物で、その女將たる實權を握つてゐて、地方有志の宴會にでも出ると、井筒屋の女將お貞婆さんと呼べば、なか／＼幅が利く代り、家にゐては、主人夫婦を呼び棄てにして、少しでもその意地の悪い心に落ちないことがあると、意張りたがるお客が家の者にがなりつく様な權幕であつた。

お君といふその姪、乃ち、その娘も、年は十六だが、叔母に似た性質で、——客の前へ出ては内氣で、無愛嬌だが、——とんなな兩親のしてゐることがもどかしくつて、もどかしくつてたまらないと云ふ風に、自分が用のない時は、火鉢

の前に坐つて、目を離さず、その長い顔で両親を使ひまはしてゐる。前年など、かゝへられてゐた藝者が、この娘の皮肉の折檻に堪へ切れないで、海へ身を投げて死んだ。それから、急に不評判になつて、あの婆さんと娘とがある間は、井筒屋へは行つてやらないと云ふ人々が多くなつたのださうだ。道理で餘り景氣のいゝ料理店ではなかつた。

僕が英語が出来るといふので、僕の家の人を介して、井筒屋の主人がその子供に英語を教へてくれと頼んで來た。それも眞面目な依頼ではなく、時々西洋人が來て、應對に困ることがあるので、「おあがんなさい」とか、「何を出しまししょう」とか、「お酒をお飲みですか、ビールをお飲みですか」とか、「藝者を呼びましょうか」とか、「大相上機嫌です、ね」とか、「またいらつしやい」とか、さういふことを専門に教へてくれと云ふのであつた。僕は好ましくなかつたが、仕事のあひまに教へてやるのも面白いと思つて、會話の目錄を作らして、そのうちを少しづつと、二人がほかで習つて來るナショナル讀本の^{（一）}と二とを讀まして見ることにした。お君さんとその弟の正ちやんとが毎日午後時間を定めて習ひに來た。正ちやんは十二歳で、病身だけに、少し薄のろの方であつた。

或日、正ちやんは、學校のないので、午前十一時頃にやつて來た。僕は大切な時間を取られるのが惜しかつたので、いゝ加減に教へてしましとふと、

「うちの藝者も先生に教へていたゞきたいと云ひます」と云ひ出した。

「面倒くさいから、厭だよ」と僕は答へたが、跡から思ふと、その時から既にその藝者は僕をだまさうとしてゐたのだ。正ちやんは無邪氣なもので、

「どうせ習らつても、馬鹿だから、分るもんか？」

「なぜ？」

「こないだも大ざらひがあつて、義太夫を語つたら、熊谷の次郎直實といふのを熊谷の太郎と云うて笑はれたんだ——あ、あれがうちの藝者です、寢坊の親玉。」

と、そとを指さしたので、僕もその方に向いた。いちじくの葉かげから見えたのは、しごき一つのだらしない寝巻き姿が、楊枝を銜はへて、井戸端からこちらを見て笑つてゐる。

「正ちやん、いゝ物をあげようか？」

「あゝ」と立ちあがつて、兩手を出した。

「ほりるよ」と、しなやかにだが、勢ひよくからだ曲がるかと思ふと、黒い物が飛んで來て、正ちやんの手をはづれて、僕の肩に當つた。

「おほ、ほ、ほ！ 御免下さい」と、向ふは笑ひくづれたが、直ぐ白いつばを吐いて、顔を洗ひ出した。飛んで來たのは僕のがま口だ。

「これはわたしのだ。さっき井戸端へ水を飲みに行つた時、落したんだらう。」

「あの狐に取られんで、まア、よかつた。」

「可哀さうに、そんなことを云つて——何といふ名か、ね？」

「吉彌と云ひます。」

「歸つたら、禮を云つといつてお呉れ」と、僕は僕の讀みかけ

てゐるメレシコウスキの小説を開いた。

正ちゃんは、裏から來たので、裏から歸つて行つたが、それと一緒に何か話をしながら、家に這入つて行く吉彌の素顔を鳥渡のぞいて見て、餘り色が黒いので、僕はいや氣がした。

二

僕はその夕がた、あたまたの勞れを癒しに、井筒屋へ行つた。それも、角の立たない様にわざと裏から行つた。

「あら先生！」と、第一にお貞婆さんが見つけて、立つて來た。「こんなむさ苦しいところからお出んでも——」

「なアに、僕は遠慮がないから——」

「まア、お這入りなさつて下さい。」

「失敬します」と、僕は臺どころの板敷きからあがつて、大きな圍爐裡のそばへ坐つた。

主人が尻はしよりで庭を掃除してゐるのが見えた。おかみさんは下女同様な風をして、廣い臺どころで働いてゐた。僕の坐つたりしろの方に、廣い間が一つあつて、そこに大きな姿見が据ゑてある。お君さんがその前に立つて、頻りに姿を氣にしてゐた。疊一枚ほどに切れてゐる細長い圍爐裡には、この暑いのに、燃木が四五本もくべてあつて、天井から雁木で釣した鐵瓶がぐら／＼煮え立つてゐた。

「どうも、毎度、子供がお世話になつて」と、爐を隔てゝ僕と相對したお貞婆さんが改まつて挨拶をした。

「どうせ、丁寧に教へてあげる暇はないのだから、お禮を云

はれるまでのことはないので。」

「この暑いのに、よう精が出ます、な、朝から晩まで勉強をなさつて？」

「さうやつてゐなければ喰へないんですから。」

「御常談を——それでも、先生は外の人と違つて、遊びながらお仕事が出来るので結構で御座ります。」

「貧乏ひまなしの譬へになりますやう。」

「どう致しまして、先生——おい、お君、先生にお茶をあげないか？」

そのうち、正ちゃんがどこからか歸つて來て、僕のそばへ坐つて、今聴いて來た世間のうはさ話をし出す。お君さんは茶を出して來る。お貞が二人の子供を實子の様に可愛がり、また自慢するのが近處の人々から嫌はれる一原因だと聴いてゐたから、僕はそのつもりであしらつてゐた。

「どうも馬鹿な子供で困ります」と言ふのを、

「なアに、ふたりとも利口なたちだから、おぼえがよくツて末頼母しい」と、僕は讃めてやつた。

「おツ母さん、實は氣が鬱して來たんで、一杯飲ましてもらひたいんです、どっかいゝ座敷を一つ開けてもらひませうか？」

「それは有難たり御座ります」と、お貞はお君に目くばせしながら、

「風通しのえゝ二階の三番がよかる。あすこへ御案内おし。」

「なアに、どこでもいゝですよ」と、僕は立つてお君さんについて行つた。煙草盆が來た、改めてお茶が出た。

「何をおおがりなさいます」と、お君のおきまり文句らしい

のを聴くと、僕が西洋人なら僕の教へた片言を試みるのだらうと思はれて、何だか厭な、小續な娘だといふ考へが浮んだ。僕ははい、加減に見つくるつて出す様に命じ、巻煙草をくはへて寝ころんだ。

先づ海苔が出て、お君が鳥渡酌^{ちやうど}をして立つた跡で、ちびりちびり飲んでゐると二三品は揃つて、そこへお貞が相手に出て來た。

「お獨りではお寂しから、婆々アでもお相手致しませう。」

「結構です、まア一杯」と、僕は盃をさした。

婆さんはいろんな話をした。この家の二三年前までは繁盛したことや、近頃は一向客足が遠いことや、土地の人々の薄情なことや、世間で自家の缺點を指摘してゐるのは知らないで、勝手のいゝ泣き言ばかりが出た。やがてはしご段をあがつて、廊下に違つた足音がすると思ふと、吉彌が鉢子を持つて來たのだ。けさ見た素顔やなり振りとは違つて、尋常な藝者に出來あがつてゐる。

「けさはどは失禮致しました」と、しとやかながら冷かす様に手をついた。

「僕こそお禮を云ひに來たのかも知れません。」

「かも知れませんが、お禮になりますまい!」

「いや、どうも——それでは、ありがたう御座ります」と、僕はわざとらしくあたまを下げた。

「まア、それで、あたい氣がすんだ、わ」

吉彌はお貞を見て、勝利がはに扇子を使つた。

「全體、まア」と、はじめから怪^{おかし}な様子をしてゐたお貞が、

「どうしたことよ、出し抜けになぞ見た様で?」

「なアに、おッ母さん、けさ、僕が落したがま口を拾つてもらつたんです」といふと、その跡は吉彌の笑ひ聲で説明された。

「それでは、いッそだまつてをれば儲かつたのに。」

「ほんとに、あたい、さうしたらよかつた。」

「生憎銅貨が二三錢と來たら、如何に吉彌さんでも驚くだらう。」

「この子はなか／＼慾張りですよ。」

「あら、叔母さん、そんなことはないわ。」

「まア、一つさしませう」と、僕は吉彌に猪口^{しよこ}を渡して、「今お座敷は明いてゐるだらうか?」

「叔母さん、どう?」

「今のところでは、口がかゝつてをらない。」

「ぢやア、僕がけさのお禮として玉をつけませう。」

「それは濟みませんけれど」と云ひながら、婆アさんが承知のしるしに僕の猪口に酒を酌いで、下りて行つた。

三

「お前の生れはどこ?」

「東京。」

「東京はどこ?」

「浅草。」

「浅草はどこ?」

「あなたはしつツこいのね、千束町^{せんすくまち}よ。」

「あ、あの薄溜うすなみの様な池があるところだらう？」

「おあいにくさま、あんな池は速くにうまつてしまひましたよ。」

「ぢやア、うまつた跡にぐらつく安借家が出来た、その二軒目だらう？」

「しどいわ、あなたは」と、ぶつ眞似をして、「はい、これでもうちへ歸つたら、お嬢さんで通せますよ」

「お嬢さん藝者萬歳」と、僕は猪口をあげる眞似をした。三味を弾かせる、と、ぺこん／＼とごまかし弾きをするばかり。面白くもないが、僕は酔つたまぎれに歌ひもした。

「もう、よせ／＼。」僕は三味線を取りあげて、脇に投げやり、「おれが手のすぢを見てやらう」と、右の手を出させたが、指が太く短く、實に無格好であつた。

「お前は全體いくつだ？」

「二十五。」

「うそだ、少くとも二十七だらう？」

「ぢやア、さうして置いて？」

「お父さんはあるの？」

「あります。」

「何をしてゐる？」

「下駄屋。」

「おッ母さんは？」

「藝者の桂庵。」

「兄さんは？」

「勸工場の店番。」

「姉さんは？」

「ないの。」

「妹は？」

「藝者を引かされる筈。」

「どこにつとめてゐるの？」

「大宮」

「引かされてどうするの？」

「その人の奥さん。」

「なに、妾だらう。」

「妾なんか、つまりませんわ。」

「ぢやア、おれの奥さんにしてやらうか？」と、からだを引ッ張ると、「はい、よろしく」と、笑ひながら寄つて來た。

四

翌朝、食事をすましてから、僕は机に向つてゆうべのことを考へた。吉彌が電燈の球に「やまと」のあき袋をかぶせ、はしご段の方に耳をそば立たた時の様子を見て、もうい奴、見ず轉の骨頂だといふ嫌氣がしたが、然し自分の自由になる物は、——犬猫を飼つてもさうだらうが——それが人間であれば、如何なお多福でも、一層可愛くなるのが人情だ。國府津にゐる間は可愛がつてやらう、東京につれて歸れば面白からうなど、それからそれへ空想をめぐらしてゐた。

下座敷でなまめかしい聲がして、段々二階へあがつて來た。吉彌だ。書物を開からうとしたところだが、まんざら厭な氣もしなかつた。

「田村先生、お早う。」

「お前かい？」

「来たら、いけないの？」びったり、僕のそばにからだを押しつけて坐つた。それっきりで、目が物を云つてゐた。僕はその顔をいだいて口づけをしてやらうとしたら、わざとかほをそむけて、

「厭な人、ね。」

「厭なら来ないが、いゝ、さ。」

「それでも、来たの——あたし、あなたの様な人が好きよ。商賣人？」

「あゝ、商賣人。」

「どんな商賣。」

「本書き商賣。」

「そんな商賣がありますもんか？」

「まア、ない、ね。」

「人を馬鹿にしてゐるの、ね」と、僕の肩をたゝいた。

僕を商賣人と見たので、また厭氣がしたが、他日わが國を風靡する大文學者などと威ばつたところで、かの女の分らう筈もないから、茶化すつもりでわざと顔をしかめ、

「あ、いたゝ！」

「うそ／＼、そんなことで痛いのですか？」と、ふき出した。卦算の龜の子をおもちやにしてゐた。

「全體どうしてお前はこんなところにぐづつてゐるんだ？」

「東京へ歸りたいの。」

「歸りたきやア早く歸つたらいいぢやアないか？」

「おッ母さんにさう云つてやつた、わ、迎へに來なきやア死んぢまりつて。」

「おそろしいこつた。然しそんなことで、びくつくおッ母さんぢやアあるまい。」

「おッ母さんはそりやア／＼可愛がるのよ。」

「獨りでうぬぼれてやアがる。誰がお前の様な者を可愛がるもんか？一體お前は何が出来るのだ？」

「何でも出来る、わ。」

「第一、三味線は下手だし、歌もまづいし、こゝから聴いてゐても、たゞきやア／＼騒いでるばかりだ。」

「ほんととは、三味線はきらひ、踊りが好きだつたの。」

「ぢやア、踊つて見るが、いゝ」とは云つたものの、ふと顔を見合はせたら、抱き附いてやりたい様な氣がしたのを、しつこいと思はせない爲め、まぎらしに仰向けに倒れ、兩手をうしろに組んだまゝ、その上にあたまをのせ、吉彌が机の上でいたづらをしてゐる横がほを見ると、色は黒いが、鼻柱が高く、目も口も大きい。それに丈が高いので、役者にしたら、舞臺づらがよく利くだらうと思ひ附いた。鳥渡斷つて置くが、僕は或脚本——それによつて僕の進退を決する——を書く爲め、材料の整理をしに來てゐるので、少くとも女優の獨りぐらゐは、之を演ずる段になれば、必要だと思つてゐた時だ。

「お前が踊りを好きなら、役者になつたらどうだ？」

「あたゝい、賛成だ、わ。甲州にゐた時、朋輩と一緒に五郎、十郎をやつたの。」

「さぞこの尻が大きかつたらう、ね」うしろからぶつと、

「よして頂戴よ、お茶を引く、わ」と、僕の手を拂つた。

「お前が役者になる氣なら、僕が十分周旋してやらア。」

「どこへ、本郷座？ 東京座？ 新富座？」

「どこでもいゝや、ね、それは僕の胸にあるんだ。」

「あたゐ、役者になれば、妹もなりたがるにきまつてる。それに、あたゐの子——」

「え、お前の子供があるんか？」

「もとの旦那に出来た娘なの。」

「いくつ？」

「十二。」

「意氣地なしのお前が子までおツつけられたんだらう？」

「さうぢやアない、わ。青森の人で、手が切れてからも、一年に一度ぐらゐは出て来て、子供の食ひ扶持ぐらゐはよこすわ。——それが面白い子よ。五つ六つの時から踊りが上手なんで、料理屋や待合から借りに来るの。「はい、今晚は」ッて、澄ましてお客さんの座敷へ這入つて来て、踊りがすむと、「姉さん、御祝儀は」ッて催促するの。小癪な子よ。芝居は好きだから、あたゐよく仕込んでやる、わ。」

吉彌は直ぐ乗り氣になつて、いよくさうと定まれば、知り合ひの待合や藝者屋に披露して引き幕を贈つて貰はなければならぬとか、披露にまはる衣服にこれ／＼かゝるとか、かの女も寝ころびながら、いろ／＼の注文をならべてゐたが、僕は、その時になれば、どうとも工面してやるかと返事をし、先づ二三日考へさせることにした。

五

それからといふもの、僕は毎晩の様に井筒屋へ飲みに行つた。吉彌の顔が見たいのと、例の決心を確めたいのであつたが、當人の決心が先づ本統らしく見えると、直ぐまた僕はその親の意見を聴きにやらせた。親からは近々當地へ来るから、その時よく相談するといふ返事が來たと、吉彌が話した。僕一個では、また、或友人の劇場に關係があるのに手紙を出し、かう／＼いふ女があつて、かう／＼だと、その缺點と長所とを誇張しないつもりで一考を求め、遊びがてら見に来てくれろと云つて置いたら、ついでがあつたからと云つて出て來てくれた。吉彌を一夕友人に紹介したが、もう、その時は僕が深入りし過ぎてゐて、女優問題を相談するよりも、二人ののろけを見せた様に見えたのだらう。僕よりもずつと年若い友人は、来る時にも「田村先生はゐますか」といふ様な調子でやつて来て、歸つた時にはその晩の勘定五圓なにがしを拂つてあつたので、氣の毒に思つて、僕は直ぐその宿を訪ふと、まだ歸らないと云ふことであつた。どこかでまた焼酎を飲んでゐるのだらうと思つたから、その翌朝を待つて再び訪問すると、もう出發してゐなかつた。僕は何か興ざめた氣がした。それから、一週間、二週間を経ても、友人からは何の音沙汰もなかつた。然し、僕は、どんな難局に立つても、この女を女優に仕立てあげようといふ熱心が出てゐた。

六

僕は井筒屋の風呂を貰つてゐたが、雨が降つたり、餘り涼しかつたりする日は沸かさないで、自然近處の銭湯に行くことになつた。吉彌も自分のうちのは立つても夕がたなどで、お座敷時刻の間に合はないと云つて、銭湯に行つてゐた。僕が行く頃には吉彌も來た、吉彌の來る頃には僕も行つた。別に申し合はせたわけでもなかつたが、時々は向ふから誘ふこともあつた。氣が附かずゐたが、毎度風呂の中で出くはす男で、石鹼を女湯の方から貰つて使ふのがあつて、僕はいつも厭な、にやけた奴だと思つてゐた。それが一度向ふから餘り女らしくもない手が出て、

「旦那、しゃぽん」といふ聲が聴えると、てつきり吉彌の聲であつた。男はいつも女湯の方によつて洗つてゐた。

このふたりは湯をあがつてからも、必らず立ち話した。男は腰巻き一つで、うちはを使ひながら、湯の番人の坐つてゐる番臺のふちに片手をかけて女に向ふと、女はまた、どこで得たのか、白い寒冷紗の襷つき西洋寝巻をつけて、そのそばに立ちながら涼んでゐた。湯あがりの化粧をした顔には、ほんのりと赤みを帯びて、見ちがへるほど美しかつた。

外にも藝者の這入りに來てゐるのは多いが、いつも目に立つのはこの女がこの男と相對してふざけたり、笑つたりしてゐたことである。はじめはこの男をひいきのお客位にしか僕は思つてゐなかつたが、石鹼事件を知つたので、これは僕の戀がたきだと思つた。否、戀がたきとして競争する必要もな

いが、吉彌が女優になりたいなどは眞ツかなうそだと合點した。急に胸がむか／＼として來ずにはゐられなかつた。その様子がかの女には見えたくも知れないが、僕は之を顔にも見せないつもりで、いそいで衣服をつけてそこを出た。しまつたと後悔したのは、出口の障子をつい烈しくしめたことだ。

けふは早く行つて、あの男またはその他の人に呼ばれないうちに、吉彌めをあげ、一つ精一杯なじつてやらうと決心して、井筒屋へ行つた。湯から歸つて直ぐのことであつた。

「叔母さん。」僕もこゝの家族の云ひならしに従つて、お貞婆アさんをさう呼ぶことにしたのだ――

「けふは今から吉彌さんと呼んで、十分飲みますぞ。」

「毎度御ひいきは有難う御座いますけれど、先生はさうお遊びなさつてもよろしう御座いますか？」

「なアに、かまひませんとも。」

「然し、まだ奥さんにはお目にかゝりませんけれど、おうちでは獨りで御心配なさつてをられますよ。それがお可哀さうで。」

「かゝアは何も知つてませんや。」

「いゝえ、先生の様なお氣質では、つれ添ふ身になつたら大抵想像がつきますもの。」

「よしんば、知れたツてかまひません。」

「先生はそれでもよろしからうが、私どもがそばにゐて、奥さんにすみません。」

「心配にやア及びません、さ。」景氣よくは應對してゐたものの、考へて見ると、吉彌に熱くなつてゐるのを勘づいてゐ

るので、旦那があるからとても駄目だといふ心をほのめかすのではないかも知れないことではない。また、一方には、飲むばかりで借りが出来るのを、若し拂はれない様なことがあつてはと心配し出したのではないかも知れない。僕はわざと作り笑ひを以つて平氣をよそひ、お貞やお君さんや正ちゃんやと時間つぶしの話をした。吉彌がまだ湯から歸らないのをひそかに知つてゐたからだ。

「吉彌は風呂に行つてまだ歸りませんが、もう、歸りさうなものだに、なア」と、お貞はお君に云つた。

「もう、一時間半、二時間にもなる」と、正ちゃんの時計を見て口を出した。

「また、あの青木と蕎麥屋へ行つたのだらう」お君が長い顎を動かした。蕎麥屋と聽けば、僕も吉彌に引ッ込まれたことがあつて、よく知つてゐるから、そこへ行つてゐる事情は十分察しられるので、いゝことを聽かしてくれたと思つた。然し、この利口ではあるが小續な娘を、教へてやつてゐるが、僕は内心非常に嫌ひであつた。年にも似合はず、人の缺點を横からにらんでゐて、自分の氣に食はないことがあると、何も云はないで、親にでも強く當る。

「氣が強うて困ります」とは、その母が僕に會つて云つたことだ。まして雇ひ人などに對しては、最も皮肉な當り方をするので、吉彌はいつもこの娘を見るとぶり／＼してゐた。その不平を吉彌は度々僕に漏らすことがあつた。もつとも、お君さんをさういふ氣質に育てあげたのは、もとはと云へば、親達が悪いのらしい。世間の評判を聽くと、まだ肩あげも取

れないうちに、箱根の或旅館の助平おやちから大金を取つて、水あげをさせたといふことだ。小續な娘だけに段々焼けッ腹になつて来るのは當り前だらう。

「あの青木の野郎、今度來たら十分云つてやらにやア」と、お貞が受けて、「借金返せないもんだから、うちへ來ないで、こそ／＼とほかでぬすみ喰ひをしやアがる！」

子供はふたりとも吹き出した。

「吉彌も吉彌だ、あんな奴にくツついてをらなくとも、お客さんはどこにでもある。——あんな奴があつて、うちの商賣の邪魔をするのだ。」

さう思ふのも實際だ。僕が來てからの様子を見てゐても、料理の仕出しと云つてもさうある様には見えないし、あがるお客はなほ更ら少ない。たよりとしてゐたのは、吉彌獨りのかせぎ高だ。毎日々がたになると、家族は圍爐裡を取りまいて、吉彌の口のかゝつて来るのを今か今かと待つてゐる。

やがて吉彌はのっそり歸つて來た。

「何をぐゞ／＼してをつたんだ？ 直ぐお座敷だよ。」お貞はその割り合ひに強くは當らなかつた。

「さう」吉彌は平氣で返事をして、爐のそばに坐つて、「いらつしやい。」僕に挨拶をしたが、まるめて持つてゐた手拭としやぼんとをどこに置かうかとまごついてゐたが、それを爐のふちへ置いて、

「一本、どうか」と、僕のそばの巻煙草入れに手を出した。

その時、吉彌は僕のうしろに坐つてゐるお君の鋭い目に出くはしたらしい。急に險相な顔になつて、「何だい、そのに

らみさまは？ 蛙ぢやアあるめいし。手拭をこゝへ置くのがいけなけりやア、勝手に自分でどこへでもかけるがいゝ！

「いけ好かない小まツちやくれだ！」

「一體どうしたんだ」と、僕が鳥渡吉彌に當つて、お君をふり返ると、お君は黙つて下を向いた。

「あたいがゐるのがいけなけりやア、いつからでも出すがいゝ。へん、去年身投げをした藝者の様な意氣地なしではない。死んだつて、化けて出てやらア。高がお客商賣の料理屋だ、今に見るがいゝ」

と、吉彌は頻りに力んでゐた。

僕は何にも知らない風で、かの女の口をつぐませると、それまでわく／＼してゐたお貞が口を出し、

「まア、えい。まア、えい。——子供同士の喧嘩です、先生、どうぞ惡からず。——さア、吉彌、支度、支度。」

「厭だが、行つてやらうか」と、吉彌はしぶ／＼立つて、大きな姿見のある化粧部屋へ行つた。

七

「お座敷は先生だツたの、ねえ、——あんなことを云つて、どうも失禮」と、吉彌は三味線を以つて這入つて來た。

「……」僕はさつきから獨りで、どういふ風に油をしぼつてやらうかと、頻りに考へてゐたのだが、やさしい聲をして、やさしい様子で來られては、今まで胸にこみ合つてゐたさまたまの忿怒のかたちは、太陽の光に當つた霧と消えてしまつた。「お酌」と出した徳利から、心では受けまいと定めてゐた酒

を受けた。然し、まだ何となく胸のもつれが取れないので、碌に話をしなかつた。

「おこつてるの？」

「……」

「えゝ、おこつてゐるの？」

「……」

「あたゐ、知らないわ！」

吉彌は赫と顔を赤くして、立ちあがつた。そのまゝ下へ行つて、僕のおこつてゐることを云ひ、湯屋で見たことを妬いてゐるのだと云ふことが若しも下のものに分つたら、僕一生の男を下げるのだと心配したから、

「おい、おい！」と命令する様な強い聲を出した。それでも、かの女は行つてしまつたが、まさかそのまゝ來ないことはあるまいと思つたから、獨りで酌をしながら待つてゐた。果して銚子を持つて直ぐ再びやつて來た。向ふがつかんとしてゐるので、今度は僕から物を云ひたくなつた。

「どうだい、僕もまた一つ蕎麥をふるまつて貰はうぢやアないか？」

「あら、もう、知つてゐるの？」

「へん、そんなことを知らない様な馬鹿ぢやアねい。役者になりたいからよろしく頼むなどと白ばツくれて、一方ぢやア、どん百姓か、肥取りかも知れねいヘツぽこ且つくと乳くり合つてゐやアがる。」

「そりやア、あんまり可哀さうだ、わ。あの人があるけりやア、東京へ歸れないぢやアないか、ね。」

「どうして、さ？」

「ぢやア、誰れが受け出してくれるの？ あなた？」

「おれのはお前が女優になつてからの問題だ。受け出すのは、心配なくおッ母さんが来て始末をつけると云つたぢやないか？」

「だから、おッ母さんが来ると云つてゐるのでせう——」

それで分つたが、おッ母さんの来るといふのは、女優問題でわざ／＼来るのではなく、青木といふ男に受け出されるのかけ合ひの爲めであつたのだ。

「あんな者に受け出されて、ヤッぱし、こんなしみつたれた田舎にくすぶつてしまふのだらうよ。」

「おほきにお世話だ、あなたよりもさきに東京へ歸りますよ。」

「歸つて、どうするんだ？」

「お嫁に行きますとも。」

「誰れが貴さまの様な者を貰つてくれよう？」

「憚りながら、これでも衣物をこさへて待つてゐてくれるものがありますよ。」

「それぢやア、青木が可哀さうだ。」

「可哀さうも何もあつたもんか？ あいつもこれまでに大金をつぎ込んだ男だから、なか／＼思ひ切れる筈はない、さ。」

「どんな馬鹿だつて、そんなのろまな男はなからうよ。」

「どうせ、おかみさんがやかましくつて、あたいをこゝには置いてけなひのだから、たまに向ふから東京へ出て来るだけのことだらう、さ。」

男はそんなものと高をくゞられてゐるのかと思へば、僕はまた厭氣がさして來た。

「お嫁に行つて、妾になつて、まだその上に女優を慾張らうとは、お前も随分ふてい奴、さ。」

「さうとも、さ、こんなにふとつたからだもの、かせげるだけかせぐん、さ、ね。」

「ぢやア、もう、僕は手を引かう」と、僕は坐り直した。「青木が呼びに来るんだらうから、下へ行け。」

「あの人は今晚來ないことになつたの——そんなに云はないで、さ、あなた」と、吉彌はあまえる様にもたれかゝつて、

「今云つたことはうそ、みんなうそ。決心してゐるんだから、役者にして頂戴よ。おッ母さんだつて、あたいから云へば、

承知するに定つてゐる、わ。」

僕は、女優問題さへ忘れゝば、恨みもつらみもなかつたのだから、かうやつて飲んでゐるのは悪くもなかつた。

吉彌はまた早くこの厭な井筒屋を抜けて、自由の身になりたいのであつた。何んでも早く青木から身受けの金を出させようと運動してゐるらしく、先刻も亦青木の云ひなり放題になつて、その代りに何かの手筈を定めて來たものと見えた。

おッ母さんから一筆青木に當てた依頼狀さへあれば、あすにも樂な身になれるといふので、僕は思ひも寄らない僞筆を頼まれた。

八

青木といふのは、來遊の外國人を當て込んで、箱根や熱海